

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子港南三丁目保育園
施設所在地	港区港南三丁目5-21
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

体をたくさん動かすことが楽しいと感じ、自発的に活動し心身ともに調和のある育ちをめざす

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

今年は乳児クラスのための、乳児が室内でもたくさんの活動ができる保育を工夫することで、子どもたちの成長や発達を引き出していくことを目的とする。

テーマの設定した経緯としては入園時子どもたちは、全体に歩き方が弱よわしい感じで、少しの段差でも転倒して鼻や顎をぶつける事などがあった。港南地区はタワーマンションに囲まれた地区で、子どもたちも高層住宅に住んでいる為、外に出る機会が少なくなってしまうのではないかと考えた。また、走り回ると苦情が来ると保護者から話を聞くこともあった為、保育園で、子どもたちがのびのびと身体を使って、思いっきり運動したり、身体を動かすことの楽しさを体験し、心身ともに健やかな発達を促していきたいと思い取り組むことにした。

この取り組みは子どもたちが自ら楽しんで取り組むことを重視することで、子どもの五感を刺激し運動機能をバランスよく整えていくことと共に、意欲の芽生えや、自己肯定感を高め、人との信頼関係を構築しながらバランスの良い成長発達を目指していきたいと考えた。園庭がない園でも工夫して活動をいかにするか考える。

2. 活動スケジュール

6/18(水)：園内にあるものでマットすべり台、フラフープトンネルを作成。

8/5 (火)：前回よりも大きいマットすべり台を作成。

講師の方からご指導いただく。自分のボディーイメージを高められるような活動を入れる。
ぶら下がる、はしご、ボール、回転椅子、マットを丸めてしがみつく動き等。

9/19(金)：購入したはしごを使用。

10/29(水)：前々回よりも更に大きいマットすべり台を作成。はしご、購入したトランポリンを使用。

11/5(水)：マットすべり台、巧技台の階段を作成。トランポリン、ソフト積木の平均台、風船マット
大型クッションを使用。

講師の方からご指導いただく。以前よりもボディーイメージが高まり、身体の使い方が
上手になったとお話を頂いた。

12/3(水)：重さのある段ボール、水の入ったペットボトルを入れたバケツ、はしご、円柱ブロック、
ソフト積木の平均台、布団を丸めたものを使用。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・ マットのお山(テーブル・マット)
- ・ たらい
- ・ はしご、巧技台
- ・ 平均台
- ・ 円柱ブロック
- ・ 大型クッションマット
- ・ 重さのある段ボール
- ・ バケツ、ペットボトル

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

<0歳児の取り組み>0歳児は、成長発達が1, 2歳児とは運動の質が違うので、個別にも行った。

☆固有覚、前提覚を刺激する遊びを中心に取り入れる

- ・傾斜の大きい坂道(ハイハイ、歩行で昇り降り、すべり台、たらいでソリ)
- ・はしご(はしごの上をハイハイ、またぐ、遊具の両端を高くし、またぐ)
- ・トランポリン(座位でリズムを取りながら身体を動かす)
- ・平均台(お尻をつけて手で移動・歩行)
- ・段ボール押し
- ・ペットボトル運び
- ・円柱ブロック(またいでバランスとり)

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・活動を始めた頃は、保育者と一緒に遊具での遊びを楽しんでいたが、次第に子どもが自ら遊びに取り組むようになっていった。
- ・月齢が上がると共に恐怖心が芽生えた児が、十分に遊ぶ姿がへっていったが、身体発達により、つかまり立ちや歩行が進んでいくと再び遊びに積極的になっていった。
- ・坂道や平均台などは保育者に助けを求めながら、一緒に遊ぶようになり達成感を共有することが増えた。
- ・他児と同じ空間で遊ぶことにも喜びを感じられるようになっていき、目を合わせながら笑顔で声をあげながら遊んでいた。
- ・遊具での遊びを重ねていくうちに、子ども自身の好きな遊具が出てくるようになり、三津から洗濯をして遊び始めていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

傾斜を登る、ハイハイで進む、マットやトランポリンなどの運動遊びを通して子ども達が手足を響応させて身体を支えようとする姿や、バランスを取りながら動きを著末井する姿が増えていった。前庭覚や固有覚への刺激が積み重なることで、姿勢の安定や体幹の使い方に変化が見られたように感じる。

床に置いたはしご渡りでは、当初は動き方が分からず、戸惑いがあったが、高さをつける工夫により、手で握る、足を上げるといった動きが生まれ挑戦する意欲に繋がった。

環境構成や難易度の設定が発達を支える上で重要であることに気づかされた。

今後も子どもの安心感を意欲を大切にしながら発達に応じた経験を段階的に積み重ねていきたい。

<定金先生より>

歩き出しがゆっくりで、O脚だった子ども達の足どりが安定してきた。取りこぼしてきた事を前庭覚、固定覚の遊びを行うことで身体を動かすことが発達に結びついた。脳の回路ができる時期に取り組めた事が良かった。また、簡単すぎてもやらず難し過ぎてもやらない。ジャストライトチャレンジが合うとトライする。それも分かった事が素晴らしい。